学苑　昭和女子大学紀要　第九七〇号（一）～（一三）（二〇二二・七）

〔論　文〕

泉鏡花「年譜」補訂（二十二）

吉田昌志

本稿は、先年刊行した岩波書店版『新編泉鏡花集』別巻二（平成十八年一月二十日）収録の泉鏡花「年譜」の補訂で、本誌七九五号（平成十九年一月一日）掲載の「補訂㈠」、七九七号（平成十九年三月一日）掲載の「補訂㈡」、八一九号（平成二十一年一月一日）掲載の「補訂㈢」、八二一号（平成二十一年三月一日）掲載の「補訂㈣」、八二六号（平成二十一年八月一日）掲載の「補訂㈤」、八四三号（平成二十三年一月一日）掲載の「補訂㈥」、八四五号（平成二十三年三月一日）掲載の「補訂㈦」、八五〇号（平成二十三年八月一日）掲載の「補訂㈧」、八五五号（平成二十四年一月一日）掲載の「補訂㈨」、八五七号（平成二十四年三月一日）掲載の「補訂㈩」、八六二号（平成二十四年八月一日）掲載の「補訂（十一）」、八六七号（平成二十五年一月一日）掲載の「補訂（十二）」、八六九号（平成二十五年三月一日）掲載の「補訂（十三）」、八七九号（平成二十六年一月一日）掲載の「補訂（十四）」、八九一号（平成二十七年一月一日）掲載の「補訂（十五）」、九〇三号（平成二十八年一月一日）掲載の「補訂（十六）」、九一七号（平成二十九年三月一日）掲載の「補訂（十七）」、九二七号（平成三十年一月一日）掲載の「補訂（十八）」、九五三号（令和二年三月一日）掲載の「補訂（十九）」、九六〇号（令和二年十月一日）掲載の「補訂（二十）」、九六九号（令和四年三月一日）掲載の「補訂（二十一）」に続くものである。

内容は、［誤記・誤植の訂正］、［本文の訂正・追加］、［典拠の訂正・追加］、［新たな項目］の四部に分かち、書式を次の通りとする。

一、表記は、原則として右「年譜」に準じた。

一、「年譜」本文の後に、【典拠】として、文献の原文、未公刊資料の翻字等を示し、典拠が複数の場合は番号を付して併記した。【注記】の項には、内容の解説、考証等を記した。

一、引用文の仮名づかいは、原文のままとし、字体は概ね現行の印刷文字に改め、読解に必要なルビを残した。傍点、圏点は概ね原文のままとした。

一、引用文の中略部分は、総て「（…）」で示し、前略、後略はいちいち断わらなかった。引用文の誤記・誤植は、［　］内に補正した。

一、典拠文献が複数項目に重出する場合も、そのつど項目ごとに示して、書誌的事項の記載を省かなかった。

一、［本文の訂正・追加］では、訂正部分、新たな追加部分に傍線を付して区別した。

一、文中の敬称は、原則として省略した。
一、必要に応じて、「＊」のあとに注記事項を補った。

［誤記・誤植の訂正］

年譜

●52頁上段21行目　同誌「時報」欄には→同日発行の「新小説」の「時報」欄には

［本文の訂正・追加］

明治三十三年（一九〇〇）　庚子　二十八歳

三月　十一日、川上眉山宅（牛込二十騎町）の文学者による小説口演会（文学者講談会トモ、午後一時開会）で「湯女の魂」を口演した。他に京の藁兵衛「久振」、巌谷小波「墓辺の薔薇」、長田秋濤「血髑髏」、尾崎紅葉「茶碗割」の口演があった。来会者は六十余名。紅葉によれば鏡花のものは一時四十五分から「劃然（きっかり）一時間」であったという。当日会衆の中には、広津柳浪に伴われた永井荷風もあった。二十五日発行の「新小説」の「時報」でこの会のことが報じられ、「其速記は新小説臨時増刊として現はるべし」と予告された。

五月　五日発行の「新小説」臨時増刊号「春鶯囀」（第五年第六巻）に三月の小説口演会（文学者講談会トモ）の口演「湯女の魂」（木川忠一郎速記）が載った。

【典拠】荷風散人「偏奇館漫談三」（「書物往来」第五冊、大正十三年十一月三十日）

○夢楽の弟子入りをしましたのは外国語学校にゐた時分のことです。柳浪先生の所に入門したのが明治三十二年、二十一歳の時で、柳浪さんの名で「薄衣」を「文芸倶楽部」に出して貰つたのですが、其れから巌谷さんの所へ伺ふやうになつて、木曜会に出ました。会はまだ続いてゐます。硯友社の会へもお伴で行きました。「新小説」に一冊に纏めて出てゐますが川上眉山の家（喜久井町）で口演会のあつた事があります。紅葉山人は「茶碗割」それから秋濤さんも眉山さんもやりました。一枚下つて泉さんも「湯女の魂」をやりました。巌谷さんは独逸語の本を持出して滔々とやられたのですが、私などは羨ましいことに思つて甚く感服しました。聴衆は硯友社の門下の人とそれから門下の門下で皆で七八十人もあつて、下駄が表通りにまで列んだ程でした。座敷は十畳と六畳位でしたらうか。午後一時頃から五時頃までだつたと思ひます。それで、同じ話をするのなら本家に就いて修行したいといふ野心で、夢楽に弟子入りをしたのです。（…）【甲二聞書】

【注記】

典拠「偏奇館漫談」は、明治三十年の中学五年生の時より、三十一年の広津柳浪入門、三十二年の朝寝坊むらく入門、三十三年の福地櫻癡入門等、諸方への入門を語った談話であるが、その中から、小説口演会の条を引用した。

口演会当時から二十四年後の談話ながら、荷風は眉山の口演とその居宅の所在以外、口演者と開始終了の時間まで、会の様子を鮮明に記憶している。したがって参会者「七八十人」も実数に近いと思われるが、「読売新聞」報（「小説口演会の景況」明治三十三年三月十三日付・三面）に拠り、内輪の数としておく。荷風「年譜」（岩波書店版『荷風全集』第三十巻、平成二十三年九月二十七日・二刷）の明治三十三年の項には、この件に関する記載は無い。

典拠の末尾に「甲二聞書」とあるが、「甲二」は「書物往来」の編輯人神代種亮（こうじろたねあき）（明治十六年六月十四日生、昭和十年三月三十日歿。享年五十三）である。島根県津和野の生れ、帚葉山人、七松庵主人の別号がある。

掲載誌「書物往来」は大正十三年五月創刊、同十五年六月終刊（全十九冊）。第六冊まで編輯人神代種亮、発行人石川巖で、第七冊以降は編輯兼発行人石川巖となり、途中斎藤昌三も参画している。典拠「偏奇館漫談」は、創刊号第一冊（大正十三年五月五日）、第二冊（同八月二十日）の「偏奇館余墨」に続くもので、「三」と表記されている。

本誌に続いて神代は「校正往来」を発行、「帚葉山人はその「校正往来」誌上に、帚葉堂主人、校梓樓、校字郎、甲二郎、好字老、加宇字呂、攷辞老等の署名で、校正に関わる日頃の蘊蓄を傾注して、いろんな記事を書いた」（岡野他家夫「校正の神様神代種亮」『書国畸人伝』桃源社、昭和三十七年六月十日）。

自分より四歳下の神代を「帚葉翁」と呼ぶ永井荷風『濹東綺譚』（岩波書店、昭和十二年八月十日）の巻末「作後贅言」は、彼の追憶録ともいうべき文章だが、「わたくしが初（はじめ）て帚葉翁と交（まじはり）を訂（てい）したのは、大正十年の頃であらう」と述べたのち、「翁の不遇なる生涯を思返し」て、

翁は郷里の師範学校を出て、中年にして東京に来り、海軍省文書課、慶応義塾図書館、書肆一誠堂編輯部其他に勤務したが、永く其職に居ず、晩年は専ら鉛槧に従事したが、これさへ多くは失敗に終つた。けれども翁は深く悲しむ様子もなく、閑散の生涯を利用して、震災後市井の風俗を観察して自ら娯（たの）しみとしてゐた。翁と交るものは其悠々たる様子を見て、郷里は資産があるものと思つてゐたが、昭和十年の春俄に世を去つた時、其家には古書と甲冑と盆栽との外、一銭の蓄（たくはへ）もなかつた事を知つた。

と記している。

また、荷風の講義を受けるべく、堀口大学とともに慶応義塾の大学予科へ入学した佐藤春夫も神代と一時交流があったが、晩年の著『小説永井荷風伝』（新潮社、昭和三十五年五月六日）で、

その頃、芥川の門に出入してゐた一人に帚葉山人と号した神代種亮といふのがゐた。これは他の連中のやうな文学青年ではなく、文学の志に一生を浪費した今を校正者となつて、校正の神さまといふはかない自負に自ら甘んじて生きてゐた。（…）何にせよ一風変つた、云はば人間の陋巷とも云ふべき荷風好みの人物であつた。荷風は彼に亡友井上唖々の面影を見出したとも云つてゐる。

（第七章「わが再び荷風に会ふまで」）

と述べている。

さらにまた明治文化研究会で神代を知ることとなった柳田泉は「荷風と帚葉山人」（岩波書店版『荷風全集』「月報」25、昭和四十年一月）で「荷風が、ひところ側近第一号のように扱っていた人物」として、

この人はなかなか面白い癖があって、そういうことで、いわば商売上ひろく文壇諸家に出入りしていたのであるが、一度出入りすると、そのお得意の有名人を自分の友達扱いにして、何々君とよぶのが常であった。谷崎、菊池、芥川、佐藤春夫、みなそれぞれ商売のお得意ではあるが、一方何々君であって、帚葉氏の友人ということになっていた。もっとも、中にはそれを漏れきいて腹を立てた人もあったらしいが、本人の帚葉氏は一向構わず、何々君をふり廻して、出入り先きで聞いて来た文壇のニュースをわが事のように聞き手に話してきかせたものである。

と述べ、末尾に、先引岡野他家夫著『書国畸人伝』に伝記のあることに触れて、「この人はたしかに畸人乃至奇人といわれて然るべき資格をもった明治人の一人であったと思う」と結んでおり、親疎の違いはあるが、荷風、佐藤、柳田、三者とりどりに回想を綴っている。

なお、「補訂（十六）」の注記で、小説口演会（文学者講談会）の第一回を、「明治三十二年十二月十七日以前」、場所を「牛込清風亭」としたが、その後、文献（須

田千里氏「『東西短慮之刃』と『本朝諸士百家記』」岩波書店版『紅葉全集』月報10、平成六年一月／梅澤宣夫氏「坪内逍遥と早稲田中学校―「早稲田興風会雑誌」を中心に―」「早稲田―研究と実践―」十五号、平成六年三月一日）を検めたところ、期日は「明治三十二年十二月九日」、場所は「早稲田中学校講堂（同校各組組長慰労会）」であったことを確認できたので、ここに訂正しておきたい。

明治三十七年（一九〇四）　甲辰　三十二歳

一月　一日発行の「新小説」（第九年第一巻）「時報」欄に「鏡花氏の大著述」として故尾崎紅葉の詳伝の編纂が報じられた。

三月　一日発行の「新小説」（第九年第三巻）巻末に泉鏡花著『紅葉先生詳伝』の近刊予告が載ったが、未刊に終った。

大正五年（一九一六）　丙辰　四十四歳

三月　九日付「読売新聞」七面の「よみうり抄」に「泉鏡花氏　は近く春陽堂より出版すべき紅葉伝を執筆中」と報じられた。

六月　八日付「読売新聞」七面の「よみうり抄」に「泉鏡花氏　近く出版すべき紅葉記を執筆中」と報じられた。

七月　一日発行の「新小説」（第二十一年第七巻）誌上「春陽堂近刊予告」の一つに「泉鏡花著」の「紅葉記」が載った。この予告は十月号まで続いたが、未刊に終った。

【典拠1】「時報」（「新小説」九年一巻、明治三十七年一月一日）

▲鏡花氏の大著述　氏は恩師故紅葉山人の詳伝を編纂する由にて既に材料大半結集済みにて近々起稿せらるべく脱稿の上は本堂より出版するの約成れり。紅葉氏が伝としては此の他に優るもの出でざるべし。

【典拠2】春陽堂近刊予告（「新小説」九年三巻、明治三十七年三月一日）

紅葉先生詳傳

泉鏡花著

明治文壇の巨人紅葉先生既に逝けり、豈其正傳なくして可ならんや。弊堂此に最も先生の寵遇を受け最も先生の平生を知悉せる天才鏡花氏に請ふて其詳傳を得たり。思ふに先生が三十七年の短き一生と文壇に於ける大なる功績とは、此に依つて長に後生評家が迷津の渡船たるべきは勿論、氏が炬の如き眼光と犀利なる筆とは、具に先生が他の一面をも抽寫し盡して餘蘊なきを得んかな。嗚呼先生にして此傳あり、氏にして此業あり、近來の名著は即ち是れ也。

（近刊豫告）

【注記】

師尾崎紅葉歿後、翌年の伝記に関する情報について、「年譜」の誤記を訂正するとともに、「補訂(一)」に記載済みの大正五年七月に加え、同じ年三月と六月の「読売新聞」「よみうり抄」の報を追加した。大正五年の典拠の引用は本文中に取込んだので省略した。

典拠2の近刊予告にもある通り、伝記の作者として「最も先生の寵遇を受け最も先生の平生を知悉せる」筆頭弟子の鏡花が撰ばれたのは当然だが、たび重なる予告報道にもかかわらず、「明治文壇の巨人」紅葉の伝記はついに刊行をみずに終った。残念ながら紅葉の「詳伝」と呼ぶべき著述はいまだ現れていない。

大正五年の「読売新聞」報については、すでに森銑三『明治大正の新聞から』（日本古書通信社〈古通豆本57〉昭和五十七年十月十日）に言及がある。なお、「紅葉記」は大正五年九月改正の『春陽堂発行図書目録』（刊記なし）巻末の近刊予告にも記載さ

れている。

紅葉逝去から十三年後の同年には、三月に執筆が報じられて以降、版元春陽堂が七月より十月まで近刊予告を出し続けているから、執筆にもそれなりの進捗があり、出版の成算が立ったのだと思われるが、発梓に至らなかったのである。この件に関する鏡花の言明は今のところ確認できていない。

明治三十八年（一九〇五）　乙巳　三十三歳

十二月　十六日、第三回紅葉祭（於紅葉館、午後二時半より）に出席、記念絵葉書（印譜葉書のうちの「堂号」の一枚）に寄書の署名をし、鏑木清方所蔵の絵葉書（印譜葉書のうちの「俗用」）へは「秋のくも尾上のすゝき見ゆる也」の句を署した。当日は、巌谷小波の開会の挨拶に続き、和田垣謙三の演説、佐藤籟斎の尺八「残月」、清元延壽太夫・清元梅吉の「神田祭」、梅坊主一座の「二人羽織」、柳家小さんの「茶碗割り」、紅葉館連中の「もみぢおんど」、会食後に市川莚升一座の演劇「短慮の刃」があった。参会者は、江見水蔭、小栗風葉、尾上新兵衛（久留島武彦）、茅原華山、川上眉山、国木田独歩、武田桜桃、寺崎廣業、中野信近、長谷川天渓、広津柳浪、星野麥人、松居松葉、安田善之助、柳原義光、依田学海ら、無慮二百余名に及び、九時すぎに散会した。福引のうち『紅葉全集』は中野信近が引当てた。巌谷小波によれば、西園寺公望も招待を俟たずに訪れ、遺影に礼拝、香料を供えたという。

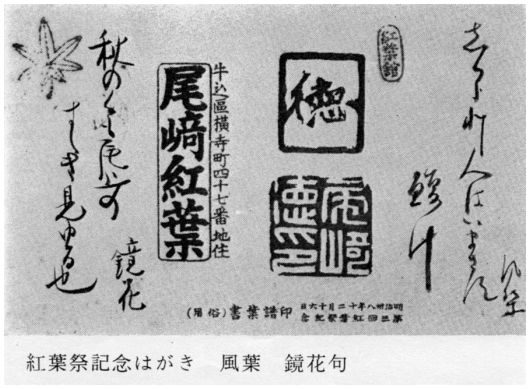
【典拠1】「紅葉祭絵はがき」写真版（「文章世界」一巻十号、明治三十九年十二月十五日）

【典拠2】「紅葉祭記念はがき　風葉　鏡花句」写真版（鏑木清方『こしかたの記』中央公論美術出版、昭和三十六年三月二十日）＊一九二頁あとの図版二頁目。

【典拠3】第三回紅葉祭順序・通知葉書（架蔵・宛名なし）

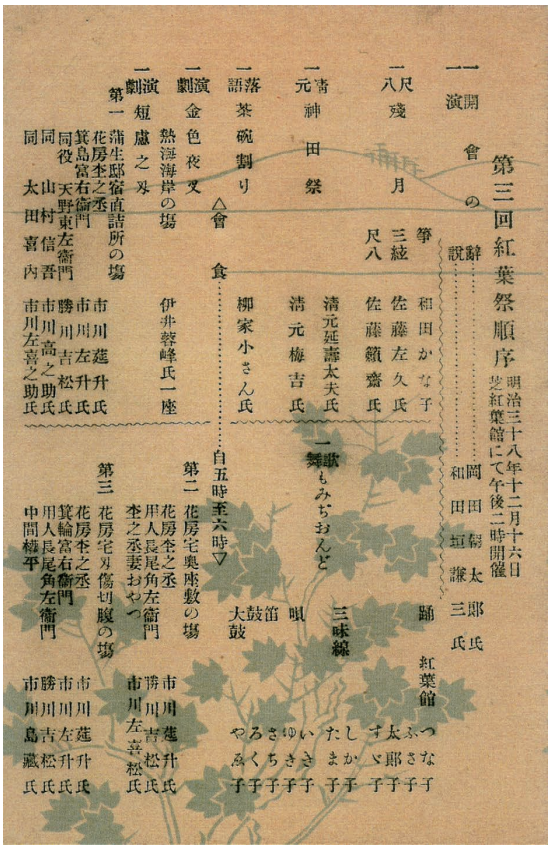
【典拠4】第三回紅葉祭紀念・印譜葉書（架蔵・宛名「牛込区東五軒町九　柳川春葉様」・差出し署名無し・消印判読不能）

典拠 1



紅葉祭記念はがき　風葉　鏡花句

典拠 2


第三回紅葉祭順序　明治三十八年十二月十六日　芝紅葉館にて午後二時開催

一開會の辭……岡田彩太郎氏

一演說……和田垣謙三氏

一尺八殘月三絃箏　佐藤左久氏　佐藤籟齋氏　和田かな子

一清元神田祭　清元延壽太夫氏　清元梅吉氏　一歌一舞もみぢおんど　三味線　唄　笛　鼓　大鼓　柳家小さん氏　紅葉館つな子　ぶん子　太郎ヲ子　ヲ子　しか子　たま子　いさき子　ゆき子　ろく子　さち子　ふく子　やす子

一落語茶碗割り

△會食……自五時至六時▽

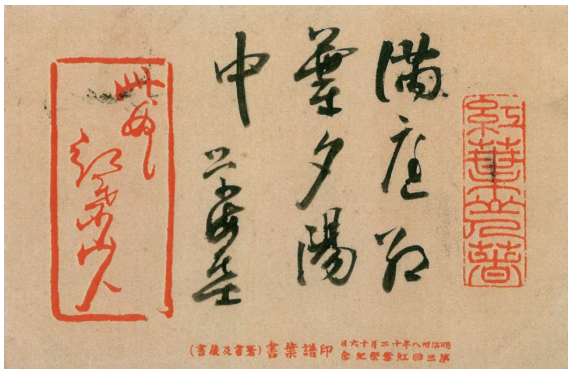
一演劇金色夜叉　熱海海岸の場　伊井蓉峰氏一座

一演劇短慮之刃　第一　蒲生邸宿直詰所の場　花房李之丞　箕島富右衛門　同役　天野東左衛門　同　山村信吾　同　太田喜内　市川蘆升氏　市川左升氏　勝川吉松氏　市川高之助氏　市川左喜之助氏

第二　花房宅奥座敷の場　花房李之丞　用人長尾角左衛門　李之丞妻おやつ　市川蘆升氏　勝川吉松氏　市川左喜松氏

第三　花房宅刃傷切腹の場　花房李之丞　箕輪富右衛門　用人長尾角左衛門　中間權平　市川蘆升氏　市川左升氏　勝川吉松氏　市川島藏氏

典拠 3



典拠 4

【典拠5】「昨日の紅葉祭」（「都新聞」明治三十八年十二月十七日付・五面）

第三回の紅葉祭は故人の第三十九回の誕辰なる昨日を以て予記の如く芝公園の紅葉館に催ほされたり会するもの文墨の林に游ぶものは云ふも更なり学者芸術家朝野の紳士淑女無慮二百余名、館を入りて其の一室に故人の遺影を安置し八足の机を供へ来会者は何れも玉串を捧げて会場に入る午後二時半巌谷小波氏開会の辞を述べ次に和田垣博士の故人追慕の演説ありて余興に入り小さんの茶碗割清元延壽の神田祭梅坊主一座二人羽織佐藤籟斎氏の尺八残月あり、更に数番の幻燈の後樓上の食堂に移り日本式立食ありき故人の雅印を押捺したる紀念絵葉書は翩々として文士画家の間に伝へられ一時小書画会の様を現じ二百余番の福引は歓呼の中に迎へられ其の第一等の当り籤なる松浦伯寄贈の額面と博文館寄贈の紅葉全集全部の某々氏の手に落ちたる時は喝采堂を動かせり斯くて蘆升左升吉松高之助左喜之助諸優の「短慮の刃」三齣を演じ終りて散会したるは九時過なりき

【典拠6】「きのふけふ」（「文芸倶楽部」十二巻一号、明治三十九年一月一日）

◎紅葉祭　例年の通り旧臘十六日紅葉館に開かれ、来会者無慮三百余名。巌谷小波氏の挨拶、和田垣謙三氏の演説の後余興に移り、梅坊主の「二人羽織」佐藤籟斎氏の尺八、紅葉館女中の「紅葉音頭」市川蘆升一座の「短慮の刃」等あり。文士美術家は更なり、各階級の人士雲の如く、福引の紅葉全集が壮士俳優中野信近に落ちたるは、同氏が東京に於て始めて「金色夜叉」を演じたる報（むくい）にやあらむとて喝采鳴りもやまざりき。また柳原伯寄附の陶額は、山人の自筆を其儘水野浪越翁の作にかゝり、極めて精巧なるものに見受けぬ。

【典拠7】巌谷小波「紅葉祭について」（「文章世界」一巻十号、明治三十九年十二月十五日）＊傍点は原文。

今年もまた紅葉祭の時節になりました。来十六日（きたる）が即ち其当日です。蓋しこ

の十六日は、故山人の誕生日なので。わざと此日を選んだのには、聊か理由もあるのです。

元来東洋流では、故人の為めの紀念会を、其忌日に開くのが常ですが、西洋では之に反して、ゲエテ祭でもシエクスピヤ会でも、大方其誕生日に開きます。それで、何も強いてハイカラがつた訳ではありませんが同じく其人を慕つて、紀念の為めに会を開くのなら、縁起でも無い忌日よりも、目出度い誕生日を選んだ方が、心持が好いからでもあり、今一つには、よし尾崎徳太郎は死んでも、紅葉山人の生命は、永く文壇に存するのであるから、大にしては我邦の文壇、小にしては我々友人共が、斯る稀世の天才を得た事を、何日(いつ)までも誇りにしたいと云ふ所から、わざと之を失つた忌日より、之を得た誕生日を選んで、毎年其会を開く事にしたのです。

尤も其忌日と雖も、決して麁畧にはして居りません即ち十月三十日には、我々硯友社員は、袂を連ねて青山に参詣して、帰途には一堂に会食して、聊か追善の意を表すると同時に、其年の紅葉祭の事を打ち合せるのが、殆んど常例に成つて居る位です。

そこで紅葉祭も、今年で四回目になるのですが、其会場を、毎回芝の紅葉館にしたのも、只其名に因んだ斗りでは無く、また、山人曾遊の場所である斗りで無く、実にその芝区が、山人誕生の地である故(から)です。(…)

それで毎回の余興にも、演劇にまれ、講談にまれ、落語にまれ、乃至謡物にまれ、成るべく故人の作から材料を取る事になつて居ます。まづ劇の方では、第一回が藤澤一座の「心の闇」、第二回が伊井一座の「夏小袖」、第三回が左団次一座の「短慮の刃」と、皆紅葉全集中の物を出しましたが、今度の第四回には、中野一座の「金色夜叉」を出す事となりました。

また講談落語では、第一回に伯知の「金色夜叉」、第三回に小さんの「茶碗割」なぞが出ました。只困るのは、他の謡曲や、清元、長唄なぞには、何分故人の作が無いので、余儀無く在来の物を出して居ります。(…)

又紀念画葉書は、毎回必ず出して居ります。第一回の時は、故人の平凡な肖像に止めておきましたが、第二回には故人の自画讃一葉、これは某婦人の秘蔵するもので、頗る珍とするに足るものでした。第三回は故人の印譜で、六枚一組。さて当年は、また真蹟物の二枚一組ですが、これは実は私の所有で、一は故人が新婚旅行先からの戯筆、一は自画像に自讃の画手紙、何れも紅葉崇拝家には、確に流涎せしむべきものです。(…)

さてこの紅葉祭は、元より故人の徳を頌する会ですから、其趣意に適つたものなら、何人でも来て差支無い所か、寧ろ大いに歓迎するのですが、何分場所が場所ですから、毎回発企者より案内を出すのは、二百通に止めておくのです。それで毎回の来会者が、少くも百五十人を下だりませんが、その中には、案内を受けないでも、新聞で聞き伝へて出席したり、また会へは出られないが、画葉書丈売つてくれなどゝ、朝から玄関へ来る篤志家もありました。

いや、篤志と云へば、第三回の時でした、今の総理大臣西園寺侯は、別に発企人からの招待を待たず、態々(わざわざ)馬車を此会へ枉げられて、而も故人の肖像の前に、丁寧なる礼拝をされた斗りか、香料若干を供へられました、此等は実に此会の栄として、発企人一同の感謝する所であります。侯が文芸の嗜み深い事は、今更云ふまでもありませんが、故山人の作物は、殊に愛読されたのださうで。さればこそ態々此挙に出でられたのでせう。

【注記】

明治三十六年十月三十日の逝去の翌々月、誕辰の十二月十六日に開かれた紅葉の追悼会である紅葉会は、翌年から紅葉祭と称し恒例の催しとなった。

典拠7は、その発企人・主催者としての巌谷小波が、第四回の直前に紅葉祭の趣

意とこの時までの内容とを語った貴重な証言ゆえ、本来は全文を引くべきだが、紙幅が許さず抄出にとどめた。末尾の西園寺公望の逸話は興味深い。

「年譜」では、鏡花の出席のみを記した場合が多いが、第三回は資料もあり、典拠1にとどまらず、会の内容、出席者もできるだけ記した。

典拠1の写真版ではなかなか判読が難しいものの、右上の一枚（俗用）に、国木田「独歩」、川上「眉山」らの署名が認められる。

典拠2『こしかたの記』は千五百部の限定版で、引用した一九二頁あとの写真頁は、後版では省かれている。鏡花とともに署名した小栗風葉の句は「志ぐれ町人はいまさず鰌汁（あはびじる）」と読める。

典拠3「紅葉祭順序」は典拠1の写真版では寄書葉書の背景となっているもので、表面の最下段には「東京博文館発売」「日本葉書会製」と印字がある。開会の辞岡田朝太郎、伊井蓉峰一座による「演劇金色夜叉」とあるが、開催後の報道の典拠5・6には言及が無いため、本文への記載を控えた。

典拠4は印譜葉書の「著書及蔵書」の一枚。「満座紅葉夕陽中　学海居士」の揮毫がある。紅葉は明治二十二年十月二日の初対面以来、文壇の先達としての学海と親交を厚くしたが、「十千万堂日録」の記載では、三十六年六月二十日の東京座「金色夜叉」観劇の際「学海夫妻の来観に会ふ。」とあるのが最後である。また、大学病院退院（同三月十四日）の後に紅葉が病床に寄せられた知己の書牘を写して「二六新報」紙上に掲げた「不養生誡」の「其二六」（同紙四月十五日付・三面）が学海の見舞文であり（末尾の日付は「癸卯三月二十四日」）、この書簡はおりから編輯が進められていた門生の献呈文集、十千万堂蔵版『換菓篇』（博文館、明治三十六年十月二十四日）の「序」となった。

架蔵の柳川春葉宛の印譜葉書は、当日販売の「六枚一組」（典拠7）のうち、典拠4を含めて都合五枚あり、筆跡は同じ、いずれも差出しを欠くが、中に「松廼舎」（安田善之助）の印の捺された「俗用」の一枚の消印が、会の翌日「38.12.17/前6」と読める。消印の判読できない他の四枚も同日付としてよいだろう。これら五枚を、当日欠席の春葉へ送った差出人は、今のところ特定できない。

余興のうち、梅坊主は大道芸人のち寄席芸人の豊年斎梅坊主（本名松本梅吉。嘉永七年一月一日生、昭和二年二月十三日歿。享年七十四）。願人坊主の身分から、剃髪して坊主を名乗り、一座を組んで茶番狂言、俄芝居、道化芝居等を興行、特に揃の浴衣で踊る「かっぽれ」は人気を博し、九代目市川団十郎らが歌舞伎にも取入れ、大道より寄席や座敷で演じる一芸となった。当日演じた「二人羽織」は一座の得意とする茶番である（以上、三省堂版『日本芸能人名事典』平成七年七月十日、倉田喜弘編『幕末明治見世物事典』吉川弘文館、平成二十四年三月十日、を参照）。

典拠3の通知葉書に「伊井蓉峰氏一座」の「演劇／金色夜叉／熱海海岸の場」とあるが、「歌舞伎」第六十九号（明治三十九年一月一日）巻末「歌舞伎日記」の「俳優」欄に「▲十二月十六日市川莚升紅葉会（ママ）にて「短慮の刃」を演じ伊井蓉峰梅坊主の俄を寄附す」と出ているから、梅坊主は、一座の演劇を出せなかった伊井がこれを寄附した代替の出演だったことが判る。

市川莚升はのちの二代目左団次（本名高橋栄次郎。明治十三年十月十九日生、昭和十五年二月二十三日歿。享年六十一）。先代の長男。数え五歳の明治十七年四月新富座に市川ぼたんで初舞台、三十二年九月に父の俳名莚升を嗣ぎ名題に昇進、三十七年八月に父を喪ったが、三十九年七月に明治座での亡父追善興行をもって二代左団次を襲名した。この年十二月から松居松葉を伴っての欧米劇壇視察を経て、四十二年十二月小山内薫とともに自由劇場を創立以後、新劇運動の先駆者としての活躍、小山内の媒により生じた永井荷風との交情、については贅言を要しない。莚升の名は、大正四年九月に十四歳下の弟（養子）道之助が継いだ。左升、左喜之助はともに先代の門人。左升は明治座の座主たる左団次の一座の番頭格であった。

所演「短慮の刃」の原作は、明治三十二年十二月九日の早稲田中学校各組組長慰労会席上（従来の牛込清風亭での開催を訂正。前項の注記参照）の口演を翌年一月二十三日より二月三日まで「読売新聞」の「口演百譚」欄に連載後、三十五年一月一日、春陽堂から『武蔵の名香阿剌比亜の林檎東西短慮之刃』（装丁斎藤松洲）として刊行された。角書にもある通り、東（錦文流作『本朝諸士百家記』）と西（「アラビアンナイト」）の酷似する二話を対照して示したもので、初演は紅葉歿後の明治三十七年十一月（十一日初日）明治座の二番目狂言（二幕、竹柴透葉脚色）、莚升一座の興行（脚本は花房李之丞を主役とする本朝の分）であったが、木村錦花『明治座物語』（歌舞伎出版部、昭和三年三月一日）によれば「不入で、或る日の如きは、土間の看客（けんぶつ）が七八人しか居な」かった、という。

『続々歌舞伎年代記　坤の巻』（利倉幸一編著、演劇出版社、昭和五十四年十二月十五日）を検めると、初演に次ぐのがこの紅葉祭における公演で、以後明治期に、大阪中座（四十年十二月）、新富座（四十一年四月）、大阪弁天座（同年十二月）、大阪松嶋八千代座（四十二年十二月）、大阪朝日座（四十三年九月）、本郷座（同年十二月）、名古屋御園座（四十四年一月）、本郷座（同年十二月）があり、毎年各地での興行が確認できるから、「金色夜叉」ほどではないまでも、「紅葉もの」の相応の演目というべきだろう。

中野信近（慶応二年三月十五日生、昭和七年一月七日歿。享年六十七）は、もと自由党大井憲太郎配下の壮士。文字通りの壮士俳優である。川上音二郎一座に入って二十六年横浜蔦座で初舞台、三十五年には開盛座で座長として夜興行を始め、三十六年愛嬌会を組織した。紅葉関係では三十五年二月に、宮戸座で「金色夜叉」（花房柳外脚色）の間貫一を演じた。典拠6に「東京に於て始（ママ）めて「金色夜叉」を演じたる」云々とあるが、別稿（「尾崎紅葉の死―その前後(三)―」「学苑」九六二号、令和三年一月一日）にも記した通り、「金色夜叉」の初演は、明治三十一年三月（二十五日初日）の市村座における藤澤浅二郎脚色、川上音二郎が間貫一を演じた興行であった。続いて梅田大阪歌舞伎（三十一年十一月。外題は「汝！」。「金色夜叉」と江見水蔭作「海の秘密」との綯交ぜ）、宮戸座（前述三十五年二月）、大阪朝日座（三十五年六月）、東京座（三十六年六月）と、紅葉の生前に都合五度の上場が確認できる。したがって典拠6の「東京に於て始めて」は、東京において二度目、とするのが正しい。

なお、井上理恵氏「「金色夜叉」初演から海外への旅立ち」（『川上音二郎と貞奴』社会評論社、平成二十七年二月二十七日）では、梅田大阪歌舞伎の再演を三十二年十一月としているが、同座は三十二年一月十三日に焼失し、以後に再建をみなかったから、この年の興行はありえない。「大阪朝日新聞」の報（「演劇零報」明治三十一年十月三十一日付・七面）に拠って、三十一年十一月一日よりの開演、と訂すべきものと思う。

以下、中野に関して「年譜」記載済みのことがらを略述すれば、明治三十五年、鏡花は「金色夜叉」宮戸座公演中の二月十一日、安田善之助の招宴（浜町弥生）で、紅葉とともに、出演の中野、千歳米坡に遇っているが、これに先立ち、三十四年十二月十五日に同じく宮戸座「瀧の白糸」の中野演ずる村越欣彌を観たのち、翌年一月「歌舞伎」誌上へ「瀧の白糸について原作者泉鏡花君の談」（ノチ「瀧の白糸について」）を寄せ、「中野の欣彌は信近に過ぎ、千歳の白糸は米坡に過ぎ、橋上の月は其の色の白きに過ぎ、強迫の場所は明るきに過ぎたり。」云々、とこれを評した。その後の四十年八月二十日、片瀬在の中野はきたる九月真砂座での「辰巳巷談」上場につき原作者の許可を得んと当時逗子滞在中の鏡花宅を訪れ、諒承を得て翌月（六日初日）の上演では船頭宗平を演じたが、以後宗平は「金色夜叉」の荒尾譲介とともに、中野の当り役となった。

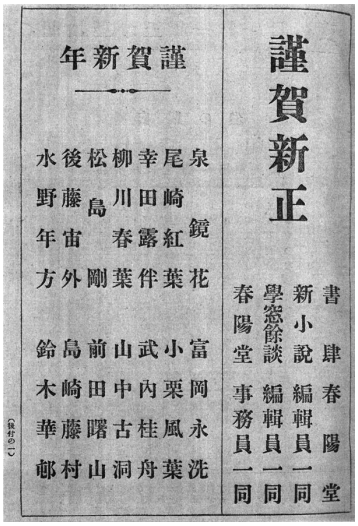
［新たな項目］

明治三十三年（一九〇〇）　庚子　二十八歳

一月　一日発行の「新小説」（第五年第一巻、臨時増刊「初日の出」）の新

年挨拶に名を列ねた。他に、小栗風葉、尾崎紅葉、幸田露伴、後藤宙外、島崎藤村、柳川春葉らの名があった。

【典拠】新年挨拶（「新小説」五年一巻、明治三十三年一月一日）


謹賀新正

書肆　春陽堂
新小説編輯員一同
學窓餘談編輯員一同
春陽堂事務員一同

謹賀新年

泉鏡花　尾崎紅葉　幸田露伴　柳川春葉　松島剛　後藤宙外　水野年方
富岡永洗　小栗風葉　武内桂舟　山中古洞　前田曙山　島崎藤村　鈴木華邨

【注記】

「新小説」の臨時増刊「初日の出」については、拙稿「「通夜物語」のかたち」（『泉鏡花素描』和泉書院、平成二十八年七月二十八日）において、本号巻末に、鏡花の著作（『照葉狂言』『通夜物語』『黒百合』）も含め、多数の「近刊予告」を掲載したことをもって、当代「新小説」春陽堂の躍進を窺うに足る壮観のさまを確認したが、この広告頁の前に掲げられた新年挨拶を見遁していたので、新たに記載した。

この「初日の出」は、前年三月三十一日に締切った「懸賞小説五月幟」の当選作を公表するため、当初「臨時増刊五月幟」と予告されながら発行の延引していた号の改題で、尾崎紅葉、幸田露伴、坪内逍遥、森鷗外の四家を撰者として募集した短篇小説の応募総数百七十九篇中、高得点の一等から五等と、番外の十篇を掲載した臨時増刊号である。掲げられた作品のうち後に世に出た作者のものでは、中村春雨「菖蒲人形」（第三等）、神谷鶴伴「見越の松」（第五等）、番外では瀧澤秋暁「はゝき木」、三島霜川「寺男」、永井荷風「烟鬼」など柳浪門の春雨と荷風、露伴門の鶴伴が選に入っている。

「年譜」にも明らかなごとく、前年明治三十二年に春陽堂から『錦帯記』（二月）、『湯島詣』（十一月）の二冊を書下し刊行していた鏡花は、師の紅葉や幸田露伴を凌いで、最も進境を示していた作者だった。

「初日の出」と同じ月二十八日発行の「新小説」（五年二巻）誌上では、従来の編輯局員前田曙山、柳川春葉に加えて、今号より後藤宙外を編輯主任として迎え、絵画担当田代暁舟、写真担当鈴木真澄を招き、これまで「客員」だった泉鏡花と小栗風葉を「正社員」とすることが告知された。さらに「賛助員」尾崎紅葉、広津柳浪、川上眉山、小杉天外、長田秋濤、「客員」幸田露伴の名が誌されてある。この告知を承けて、翌二月号の巻頭に「高野聖」が載ったのであった。

もって一月号の新年挨拶は、爾後の鏡花と「新小説」春陽堂との深い由縁の始まりを告げるものとして記録にあたいする。

明治四十三年（一九一〇）　庚戌　三十八歳

七月　二日、帝国劇場（取締役会長渋沢栄一）主催の文士招待会（於帝国ホテル）に出席した。ほかに巌谷小波、大槻如電、小山内薫、幸田露伴、小杉天外、後藤宙外、島村抱月、田口掬汀、土肥春曙、東儀鉄笛、永井荷風、益田太郎冠者、水口薇陽、森鷗外、柳川春葉、山崎紫紅らが集い、林董、末松謙澄、荘田平五郎、大倉喜八郎らの出席もあった。

【典拠1】「はなしだね―帝国劇場の文士招待会の噂―」（「読売新聞」明治四十三年七月九日付・五面）

◎此間の帝国劇場文士招待会は時代の層の二重にも三重にも違つた人達の余程不思議な集会であつた◎食卓の正面には主人役として渋沢男その左右には林董

伯末松子荘田の貴族富豪連文士側では露伴、鏡花、鉄笛、薇陽、荷風、薫、紫紅といふ顔触れ渋沢男の向側には大倉鶴彦翁之れを中心として如電、鷗外、天外、宙外、春曙、抱月、小波、太郎冠者に春葉、掬汀等の脚本家も見えた◎宴半にして渋沢氏は例の腰の低い円転滑脱な調子で自分達の手で兎に角帝国劇場といふ容れ物を作つたからこの上は諸君の手で一つ中身を作らへて頂きたい併し会社も相応の利益がなければ成立たぬのであるから今の時代とさう飛離れた者では困ると述べ◎其後で末松謙澄子曰く西洋には随分天才も出たが日本では一の近松が出た計りであまり振はん、けれども今日では益田太郎君の如き坪井雄蔵君（氏は坪内博士を坪井々々と呼んだ）の様な立派な作者もあるのだから将来大に演劇改良の為に力を盡して頂きたい併し坪井君は先頃吾々が学士会員に推薦しようとしたら何故か辞退された坪井君の御説では今日の文学や演劇に従事する者は兎角其の戯作者流と同一視される傾きがあるそれを私の様なさういふ事に従事してゐる者などが天皇陛下の勅裁を仰ぐ様な名誉ある席に列ると将来妙な差支が出来はしまいかといふ御心配の様だがさういふ世間の誤解を除く様にして頂くのが氏の任務であらうと思ふ、氏は元「書生気質」といふ小説を書いて大に文名を博されたと記憶するがあゝいふ才を是非脚本の方へ向けて頂きたい者である云々◎末松子の後で、如電、大倉二翁の演説は是非出ねばならぬところであつたが惜哉聞く事が出来なかつた◎其代り別室で茶菓の出た間に鶴彦翁得意の狂歌が出て一同の喝采を博した◎其歌に曰く「演劇の改良会の来賓に近松もあり坪内もあり」すると誰やらこの下の句は「末松もあり大倉もあり」とする方がいゝといつたので一同笑ひ崩れた

【典拠2】森鷗外「日記」（岩波書店版『鷗外全集』第三十五巻、昭和五十年一月二十二日）

〔明治四十三年七月〕二日（土）。半陰。久保大阪へ帰る。午後より母胃痙作りて悩ませ給ふ。帝国劇場会社の宴会に招かれて、帝国旅館にゆく。

【典拠3】「劇界一覧　俳優と劇場」（「歌舞伎」一二二号、明治四十三年八月一日）

▲七月一日帝国劇場は都下の新聞通信社長及び演芸記者を帝国ホテルに招待して工事竣工を披露し新作脚本の募集を発表し、又二日文士を招待す

【注記】

典拠3の報によれば、文士に先立って新聞界、演劇界関係者の招待があったわけだが、当日招かれた文士の顔ぶれは、この会の半年前に「帝国劇場当事者の一考を煩はす」（「読売新聞」四月三日付・六面）を発表していた島村抱月はじめ、坪内逍遥門下の文芸協会関係者（鉄笛、春曙、薇陽）、自由劇場の小山内に近い鷗外、荷風、また新派劇の小説原作者としての鏡花、天外、掬汀、春葉のほか、紫紅、太郎冠者らの劇作家まで、新派新劇の双方に亙って偏りがなく目配りの利いた人選である。当然ながら、会長渋沢栄一の期待する通り、これから開場する本邦初の洋風劇場の舞台に上る作品を提供しうる面々が招待されたのであった。

典拠1の新聞報に「坪内博士を坪井々々と呼んだ」末松謙澄の発言が特記されているのは、末尾の狂歌にもあるごとく、彼が二十三年前の明治十九年に演劇改良を唱えて様々な論議を惹起した際、坪内逍遥がいち早く「末松君の演劇改良論を読む」（同年十一月）において、官製による上からの「改良」に反駁し、両者に盛んな応酬のあったことをふまえているからであり、またその後の逍遥に「桐一葉」（明治二十七年十一月）、「沓手鳥孤城落月」（明治三十七年九月）、「新曲浦島」（明治三十七年十一月）等の優れた劇作のあるのを、まるで弁えぬ末松への揶揄をこめているからである。

末松の次に「二翁」と呼ばれる大槻如電は当年六十八歳、大倉喜八郎は同じく七十四歳であった（会長の渋沢栄一は七十一歳である）。

帝国劇場の創設を首唱したのは、伊藤博文、西園寺公望、林董らの政治家であり、本会の三年前、明治四十年二月二十八日の帝国劇場株式会社の創立総会（於東京商

業会議所）で、取締役会長渋沢栄一、専務取締役西野恵之助、取締役大倉喜八郎、福沢桃介、田中常徳、益田太郎、日比翁助、手塚猛昌、監査役浅野総一郎、村井吉兵衛の諸氏が決まった。

横河民輔設計の建物は四十年五月に起工していたが、本会から七か月後の四十四年二月十日に落成内覧があり、開場式は三月一日、二日の両日、柿落しは、一番目に懸賞脚本当選の山崎紫紅作「頼朝」、中幕「伊賀越道中双六」、大切が右田寅彦作「羽衣」の三演目であった。

すでに別稿（「泉鏡花と演劇」『泉鏡花素描』和泉書院、平成二十八年七月二十五日）に指摘したところだが、田中栄三が大正二年に鏡花・登張竹風共訳の「沈鐘」（ハウプトマン原作）を台本に用いて、帝国劇場で音楽劇を企画し、その承諾を求めに行った際、

鏡花さんはおやりになつても好いが、帝劇は見物をしながら煙草がのめないから、それから先に改良して下さいというので、私はひどく困つてしまつた。（田中『新劇その昔』文芸春秋新社、昭和三十二年十月三十日）

という。全館椅子席の帝国劇場は場内での飲食喫煙が禁止されていたのである。新聞に配役、日取りまで予告されながら、結局音楽劇「沈鐘」の上演は実現しなかった。さきの別稿では、この上演企画の経緯と鏡花作「夜叉ケ池」（大正二年三月）発表との関係についても述べたので、御参看いただきたい。

明治四十三年（一九一〇）　庚戌　三十八歳

十月　三十日、斎藤松洲編輯の『紅葉短冊帖』（十千万堂蔵版、春陽堂発行）が刊行され、全十九葉のうち、鏡花所蔵の五句（「紅うらの春まちかねてもゆる哉」「行かれうか佐渡はつゝしの咲処」「騒読みて端午を酔へる儒生哉」「はつ冬や髭そりたての男振」「事足りて而も師走の月夜哉」）が収められた。

【典拠】斎藤松洲編『紅葉短冊帖』（春陽堂、明治四十三年十月三十日）

【注記】

『紅葉短冊帖』は、須田千里氏編「著書目録」（岩波書店版『紅葉全集』第十二巻、平成七年九月二十七日）にも記されている通り、縦四二・五×横一一・九糎、短冊十九葉を各一葉ずつ木版彩色刷にした折本で、刷は西村熊吉、彫は大倉半兵衛と五島徳二郎、いずれも春陽堂お抱えの摺師彫師である。目録題に「紅葉短冊帖第一集」とあるが、続刊は確認されていない。

「新小説」明治四十四年二月号（十六年二巻、三日発行）巻末に写真入りの広告が出ており、「故尾崎紅葉氏真筆／斎藤松洲氏意匠」の下に書影、その下に「木版極彩色刷／別漉小奉書／二十枚折壹冊／装釘無比帙入／竪一尺四寸横四寸／緞子表装特製金貳圓五十錢　新布表紙上製金貳圓／各送料金十二錢」さらに「文芸同好家必備　紅葉短冊帖は同家に秘蔵のものをはじめ名付を選び筆意聊かも違はざる木版彩色刷にして斎藤松洲氏の意匠に成る文壇の貴宝たり　進物用恰好品」とあるのよりすれば、「緞子表装特製」本のあったことが判る。「二十枚」とは、最後の「泊り舟」と題する松洲画の短冊を算入したものである。

「読売新聞」の広告（明治四十三年十月三十日付・一面）には、「本日紅葉忌」「八周年紀念出版」の文字がある。

編者の斎藤松洲（本名太一郎。明治三年五月二十一日生、昭和九年十一月二十六日歿。享年六十五）については、別稿（「尾崎紅葉の死―その前後(三)―」「学苑」九六三号、令和三年一月一日）にも詳述したが、京都の鈴木松年門下、上村松園の兄弟子に当り、紅葉晩年に最も親炙した画人で、逝去前の三十五年以降、また歿後の著書の装丁にも関わり、遺墨としての本帖を担当するに至ったものである。

紅葉の俳句を蒐めたものは、生前に㈠『俳諧新潮』（冨山房、明治三十六年九月十九日）、歿後に、㈡瀬川疎山編刊『紅葉山人俳句集』（明治三十七年三月二十日）、㈢星野麥人編『紅葉句帳』（文禄堂書店、明治四十年四月八日）、㈣久保柳葉編『紅葉句集』（俳画堂、大正七年一月二十八日）の四種があるが、以下に、五句それぞれの初出、収録（漢数字で表記）、異同を示しておく。

「紅うらの」は、［初出］「重箪笥（かさねだんす）」日比翁助編『氷面鏡』三井呉服店、明治三十四年一月一日（署名「冬湖」）、［収録］㈠・㈡・㈢・㈣、［異同］「紅裏の」（初出）、「紅絹裏の」（㈢）。「行かれうか」は、［初出］「紫句選」「読売新聞」明治二十九年四月十三日付・四面、［収録］㈢・㈣、［異同］「佐渡へ」（初出・㈢・㈣）、「騒読みて」は、［初出］未詳、［収録］㈡・㈢・㈣、［異同］「読んで」（㈢・㈣）。「はつ冬や」は、［初出］「読売新聞」明治三十年十一月二十二日付・五面、［収録］㈡・㈢、［異同］なし。「事足りて」は、［初出］未詳、［収録］㈣、［異同］なし。

［付記］

現在、別に「尾崎紅葉の死―その前後―」の稿を継いでいるため、紅葉関係の事項を中心に記すこととなった。

本文中にお名前を記した方々のご教示のほか、資料の調査に関しては、青山学院大学図書館、国立国会図書館、日本近代文学館、とりわけ本学図書館近代文庫のお世話になった。併せて深謝申し上げる。

（よしだ　まさし　日本語日本文学科）